

## 序 文

谷 中 信 一

第四號の刊行が實現した。第三號が2007年5月の刊行だったから、あれから2年近くの歳月が経過したことになる。

近年の出土資料を扱った論考の発表ペースは非常に速い。紙媒体でのんびり発表していたのでは、後れを取ってしまうということであろうか。大陸などでは、電子媒体で次々と研究成果が公開されている。(簡帛研究 <http://www.jianbo.org/> 武漢大學簡帛研究中心の簡帛網 <http://www.bsm.org.cn/> 清華大學の Confucius2000 の簡帛研究 <http://www.confucius2000.com/> 等々) そこには先陣争いにも似た熱気が感じられる。

翻って、われわれはどうであろう。われわれの研究ペースは速いとはいえないけれども、決して遅くはない。本誌の土臺となっている「上博楚簡研究會」(代表者: 池田知久 大東文化大學教授)は、月例研究會を開催し、昨年末時点で既に39回を数えている。毎回の出席者は10名から20名の間で推移している。この出席者も決して多くはないものの、定例研究會としては少なくない数であろう。しかも、メンバーは必ずしも固定していない。日本での研究を終えて歸国した留學生、彼の地での研究を希望して留學して行った我が国の大學院生、またその空白を埋めるように新たに加わったメンバーたち。集まり散じることであっても、研究會そのものは途切れることなく一貫して續いているのである。

何らの財政的援助もない中にもかかわらず、なぜかくも息長く出土資料を扱った研究會が續いているのであろうか。それは思うに、出土資料の讀解は實に骨の折れる作業だからではあるまいか。上海古籍出版社から出版されている『上海博物館藏戰國楚竹書』をどの巻でもよいから直接手に取ってみるとすぐに納得がいくはずである。原釋を参照しつつとはいえ、編聯の妥當性を吟味しながら、あの難解な楚文字の釋讀を進めていくという作業は、とうてい獨力では爲し難い。はじめは氣負い込んで取り組んでみても、その難解さにきつと投げ出したくなるであろう。ところが研究會という場になると、衆知を出し合い、あれこれ論議を進めていくなかで、疑問點が氷解することもあり、思いがけない解釋が提示されることもあり、また新たに問題點が浮かび上がることもあり、そのうちに不思議と理解が進むのである。今號にもそうして得られた成果が【譯注】には反映されている。

ところで今號では、目次をご覧になればおわかりのように、これまでの號が【譯注】をもっぱらにしていたのとはいささか趣を異にして、【論文】・【研究報告】・【文獻目錄】なども併せて収録している。これは後述するように科研研究の成果も同時にここに盛り込むことが可能になったことによる。そのため執筆者も、總勢で6名とこれまでになく多い布陣である。

萬全を期したつもりでも、思いがけない過誤や遺漏もあろうと思われる。讀者諸賢の忌憚のないご示教をお願いしたい。

ところで、譯注や論文を寄稿しているわたしが序文まで書くというのは、何か獨り

芝居をしているようでおかしい話なのだが、今號からしばらくはわたしが研究代表者を務める科研費の助成を受けた研究會（出土資料と漢字文化研究會）が出版を引き受けることとなったので、それならその責任者が序文を書くべきであろうということになり、わたしが引き受けることとなった次第である。どうかこの點もご理解賜りたい。

ついでながらわれわれの研究會は「新出土資料を通してみた古代東アジア世界の諸相－漢字文化圏の中の地域性」というのをテーマに掲げている。つまりその研究對象は、本誌のタイトルである「秦楚文化」に止まらず、中国大陸はおろか、さらに広く日本・朝鮮も視野に入れて研究することを目指しているのである。従って、今後はそうした方面の論考も掲載できればと願っている。讀者諸賢のご理解とご支援を切にお願いする次第である。

なお、本号に収載した論考等は、その執筆・出版に当たり、平成 20 年度科学研究費補助金（基盤研究（B） 課題番号 20320009）を受けている。

2009 年 1 月 30 日